第1章

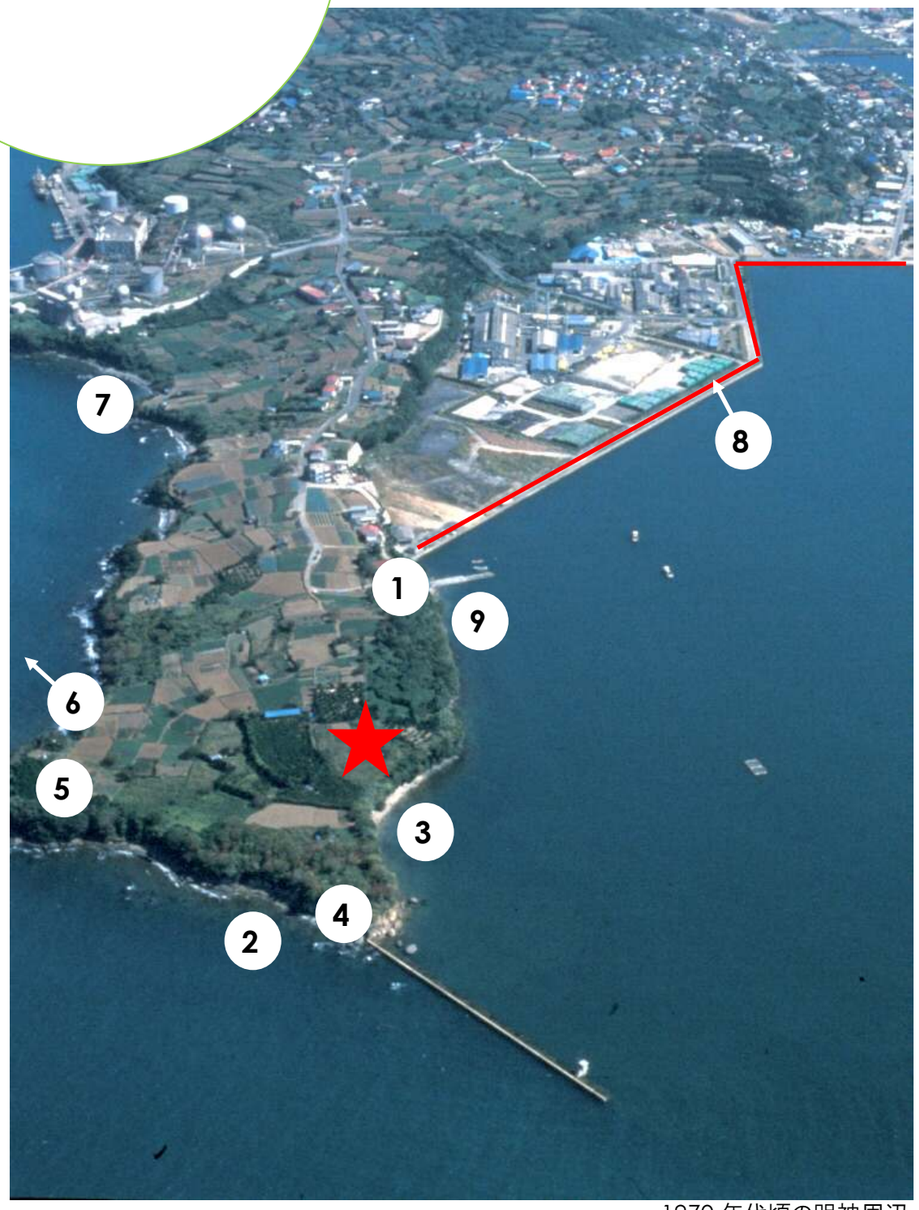
語り部・吉永理巳子さんに聞く

明神（みょうじん）の記憶（きおく）

これは、水俣湾がまだ海だった頃の写真です。
左ページの陸地が明神地区です。
現在は水俣病資料館などが建っていますが、
水俣病が起こり始めた頃の明神には、家が 4 軒
しかありませんでした。そのうちの 1 軒が語り部・
吉永理巳子さんのおうちです。
当時の明神は、畑が広がるのどかな場所で、周
りを海に囲まれており、庭先からすぐ海に下りる
ことができました。
吉永さんを通して、明神の記憶をたどります。

明神の記憶

記憶をたどる地図



1970 年代頃の明神周辺

写真提供：熊本県

地図番号		ページ
1	庭先のアコウの木	8
2	カメノテと遊ぶ	10
3	節句浜	12
4	明神さん	14
5	岬の畑	16
6	明神から見る二子島	18
7	明神から見る梅洞	20
8	海を通学する	22
9	かつての渚	24

★マークは、現在水俣病資料館があるところです

語り部プロフィール

吉永 理巳子 さん

1951 年生まれ。水俣市明神で生まれ育ち、
祖父母と父を水俣病で亡くす。
1997 年から水俣病資料館の語り部となる。
水俣病を語り継ぐために、資料館だけでなく、
各地で講演を行なっている。

明神の記憶 1

庭先のアコウの木

これがアコウの木っていうんですよ。
うちの母がお嫁(よめ)に来た時には、
もうこれくらいの大きさだったそうです。

じいちゃんたちがこの木に登って、
魚の群(む)れがいるかどうか、海を見張(みは)ってました。

この木の皮を煎(せん)じると、打撲(だぼく)にいいんだって。
たぶん貼(は)るんだと思います。
昔はおじさんたちが、木の皮をはぎに来てました。

うちではお団子を作る時、下に敷(し)く葉っぱは、
アコウかグミの葉っぱを使います。

この木は、私たちの暮(く)らしとともにありました。

明神の記憶 2

海の生きもの

カメノテと遊ぶ

カメノテは、潮(しお)が満ちた時が食事時だから、
あのひとたちも殻(から)の中から出てくるわけよ。
えんまくっていう黒いのが出てきて、プランクトンを食べる。

カメノテと遊ぶには、人間の影(かげ)を見せたらだめ。
影を見せないようにしばらくじっとして、
油断(ゆだん)してる時に黒いのをパッとつかむのよ。
カメノテは殻を閉じようとするけど間に合わない。
放してあげると慌(あわ)てて引っ込(こ)むのよね。

イソギンチャクやヒザラガイと遊ぶのも楽しかった。

海は、ただ眺(なが)めてるだけだと気づかないけれど、
ずっといると、生きものが動いてるのが見えてくるの。
そうすると、おもしろい。

明神の記憶 3

節句浜

春の大潮の頃になると、
たぶん恋路島のテングサが
切れてたんだと思うんですが、
明神に流れついてたんです。

だからみんな拾いに行ってました。
家で干して、後でところ天にして食べてた。

山の方に住んでる人たちが、
目籠や貝こさぎを持って、貝を採りに来てました。
節句浜はとてもにぎわってました。

明神の記憶 4

明神さん

写真左）現在は波でさらわれて崩れてしまったが、昔は石垣が組まれ、木で作られた明神様がお祀りしてあった。
写真右）1960 年に、宝川内と明神の人たちが、岬に祠を作ってお祀りした。

明神さんは、もともとは
宝川内っていう山の集落の氏神様だったんです。
でも豪雨で流されて、明神に流れ着いたそうです。

宝川内の人たちが探しに来て、
連れて帰ろうとしたら急に重くなったとか、
夢枕に立ったとか聞いてます。

宝川内に帰りたくないんだろうということで、
それで海の岩壁の祠にお祀りすることになったんです。

3 月になると、今でも宝川内の人たちが来て、お祭りをします。

明神の記憶 5

岬（みさき）の畑

今は環境（かんきょう）センターの敷地（しきち）になってますが、
ここら辺にうちのお墓と畑がありました。

一年を通して野菜を作っていたので、
中学生くらいまで、
スーパーで野菜を買うことはなかったです。

野菜の他に、油を採（と）るための菜の花や、
布団（ふとん）を作るための綿を育てていました。

畑の周りには、風よけに椿（つばき）の木が植えてあって、
実から油を採ってました。
はぜの木もあって、実を拾って売っていたのを覚えてます。

明神の記憶 6

明神から見る

二子島（ふたごじま）

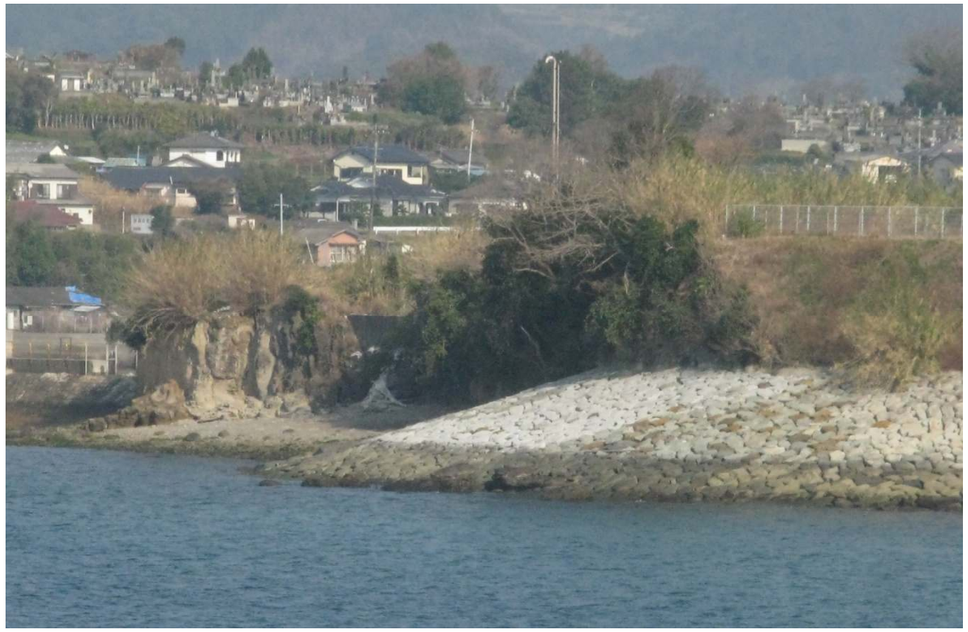
梅戸（うめど）の二子島（ふたごじま）は、昔は離（はな）れてたんだけど、
今はつながって陸続きになってます。

何かをつくろうとして
島と島の間を埋（う）めたわけじゃなくて、
チッソがカーバイドのかすを捨（す）てて、
それが土地に変わってしまったんです。

明神の記憶 7

明神から見る

梅洞（うめどう）



今はもう風化（ふうか）してなくなってしまいましたが、
大正時代までは、波が岩壁（かべ）を削（けず）ってできた空洞（くうどう）があって、
それを梅洞（うめどう）と呼（よ）んでたそうです。

今、地名になってる梅戸は、
もともとは梅洞って書いたと思います。

おじさんたちは子どもの頃（ころ）、
洞（ほら）で泳いだりして遊んでいたそうです。

もともとはきれいな海岸線だったけれど、
大正・昭和の時代には、
チッソの港やプラント、ヘリポートができました。

今、あそこの新しい石で固めてあるところは、
チッソのダイオキシン捨（す）て場になっています。

明神の記憶 8

海を通学する

（写真上）溝をはさんで右側が 1960 年代にカーバイドのかす捨て場として埋め立てたところ。白くにじみ出ているのはカーバイド。木が植えてあるところがかつての堤防で、吉永さんはその上を通学していた。
左側（道路側）は、1970~80 年代に、メチル水銀を含んだヘドロや汚染魚を処分するために埋め立てたところ。

小学校へは、海岸を、石を飛び越えながら通ってました。
ところが小学 3 年生くらいになると、
チッソのカーバイドのかす捨て場をつくる工事が始まりました。

埋め立てるためには、まず堤防から作るからね。
今、夾竹桃が植えてあるところが堤防でした。
工事が始まってしばらくは、堤防の右も左も海でした。

高校生の頃は、堤防の上を歩いて、
海を横切って学校に行ったのを覚えてます。

今は埋め立てて、低くなってるから怖くないけど、
両側に海があった頃はけっこう高くて、
めまいがする時がありました。

明神の記憶 9

かつての渚（なぎさ）

1960 年

同じ場所で撮（と）った 2 枚の写真。

吉永さんの家の庭先から石段（だん）を下りると、すぐ海に出る。
潮（しお）が引いた海岸は、子どもたちの遊び場だった。
また、この渚のあたりで、熊本大学や保健所のネコ実験用の貝が採（と）られた。

時代とともに風景は変わり
語り継（つ）がれなければ
どのような場所であったかという
土地の記憶（きおく）は失われていきます

2013 年